

九州大学大学院農学研究院紀要投稿規定

(2003年10月制定, 2010年1月改定, 2011年5月改定, 2017年1月改定,
2020年9月改定)

A. 一般的事項

1. 論文および著者

紀要に掲載する論文は, 下記の a, b, c, d のいずれかに該当する者が実施した研究調査に基づく論文で, 著者が所属する本研究院研究室(生物環境利用推進センター, 熱帯農学研究センターを含む)の業績であるものに限る.

- a. 在職中の本研究院教員, 本学部職員およびそれに準ずる者
- b. 本研究院教員指導の下で研究した大学院生, 学部生, 研究生またはそれらと同等の学力を有すると認められた者
- c. 学外からの訪問教授および訪問研究員
- d. 本研究院教員あるいは本学部職員と共同研究を行った外部機関の研究者

ただし, b, c, d の場合には本研究院教員あるいは本学部職員との共著論文であること.

2. 著作権

紀要に掲載された論文の著作権は, 国立大学法人九州大学大学院農学研究院に帰属する. 本誌の著作権に関わる一切の業務は編集委員会が執り行う. 本項の著作権に関する規定は紀要47巻2号(平成15年2月28日発行)から適用する.

3. 原稿の提出および作成

- a. 原稿は編集委員に提出し, 編集委員会でこれを受理する. 提出にあたっては, 編集委員会指定の投稿申込書に必要事項を記入の上, 校閲した所属研究室の教授(教授不在の場合は准教授)の認印を受けなければならない. 認印のある投稿申込書をスキャンしPDF等の電子ファイルで編集委員に提出する.

- b. 紀要には欧文原稿が掲載される.

- c. 原稿の作成にあたっては, 別項 B の原稿作成要領を参照のこと.

- d. 編集委員会は, 必要に応じて著者に原稿または付図・付表の改訂を要求し, 説明を求めることがある.

4. 論文の掲載順序, 論文の長さなど

- a. 論文の掲載順序は, 原則として植物学, 動物学, 化学, 物理学, 地水環境学, 社会科学分野の順とし, 同一分野では原稿の受付順とする.

- b. 紀要に掲載される1論文の長さは, 原則として印刷頁20頁以内とする.

5. 校正

- a. 校正刷の受渡しは必ず編集委員を経て行う. 著者校正は正確かつ迅速に行い, 必ず指定の日時を厳守のこと. 著者校正は原則として初校までとする.

- b. 著者校正は誤植の訂正に止め, 文章の削除あるいは加筆, 並びに付図・付表の変更などは行わないこと.

- c. 校正にあたっては「校正便覧」, その他校正に関する成書を参照のこと.

6. 投稿料

1論文につき10,000円とし, 著者の所属研究室の実費負担とする.

B. 原稿作成要領

1. 原稿は電子ファイルとする。付図・付表は本文とは別ファイルにする(電子化が不可能なものについては、原図で入稿する)。これらの電子ファイルおよび原稿 PDF を編集委員に提出する。原稿の作成には Windows 版あるいは Mac 版の各種文章作成ソフトウェアを使用すること。
2. 原稿の第 1 頁は、論文表題、著者名、所属名のみを記し、B-9 で規定する Running head の書き込み場所は第 1 頁上段欄外とする。本文は第 2 頁から書きはじめること。脚注があれば適宜下段欄外に書くこと。
3. 原稿には必ず頁番号を付けること。
4. 原稿は、A4 版に必ず double space で作成すること(原稿は 1 頁に 25 行を標準とする)。
5. 原稿の構成は一般に、
ABSTRACT
Key words
INTRODUCTION
MATERIALS AND METHODS
RESULTS
DISCUSSION
AUTHOR CONTRIBUTIONS
ACKNOWLEDGEMENTS
REFERENCES
の順序とする。ただし、ABSTRACT は論文の頭書に必ず付け、ABSTRACT に続けて Key words を記すこと。
また、第 1 レベルの見出し(章)は全て大文字、第 2 レベルの見出し(節)はボールド体、第 3 レベルの見出し(項)はイタリック体とし、いずれにもレベル番号は付けないこと。
6. ABSTRACT の長さは 300 語以内とする。
7. Key words は 5 つ以内とし、アルファベット順に並べコンマで区切る。
8. 英文以外の論文(例えば仏文、独文によるもの)の ABSTRACT は必ず英文で記すこと。
9. 原稿には論文表題および著者名を略記した Running head をそれぞれ付け、原稿の第 1 頁上段欄外に書きこんでおくこと。著者名は、著者が 2 名の場合は *J. O. Smith and M. A. Jones*, 3 名以上の場合は *J. O. Smith et al.* のように略記する。
10. 学名は必ずイタリック体とすること。学名のほかにイタリック体とするラテン語には次のようなものがある。
et al., *ex*, *ibidem* (*ibid.* と略して可), *in litteris* (*in litt.* と略して可), *in vacuo*, *in vitro*, *in vivo*, *per os*
次のラテン語起源の略字は原則としてイタリック体としない。
ca., *cf.*, *e. g.*, *etc.*, *i. e.*, *l. c.* (*loc. cit.* と書く), *vid.*, *viz.*
物理量・変量を示す記号はイタリック体とし、ベクトル量の記号はボールド・イタリック体とする。下付き添字または上付き添字は、それ自体が物理量・変量を表わすときはイタリック体、その他の場合はローマン体とする。
11. 次に示すようなまぎらわしい文字の場合には、著者は明瞭にその区別を原稿にあらわしておくことが望ましい。
1 (イチ) と 1 (エル) と I (アイの大文字)
o (オー) と o (オーのイタリック体) と O (オーの大文字) と 0 (ゼロ)
- (ハイフン) と - (マイナス) と — (ダッシュ)
ギリシア文字にはその文字の名称を原稿の余白に記載しておくことが望ましい。例えば π にはパイ、 τ にはタウなど。
ハイフンを必要とする単語、例えば *co-sponsor*, *one-sided* などのハイフンが原稿の行末にきたときは適宜な方法(例えば *one-/* として // を朱書しておく)により明示しておくこと。
12. 編集委員会が指定した字体を必ず使用

すること。ただし、活字について特に希望がある場合には、原稿 PDF を印刷会社の担当者が、見た際に直ちに確認できるよう配慮すること。

13. 単位は国際単位系 (SI) を使用すること。

14. 付図・付表がある場合には、その概略の挿入位置を原稿の余白に指示しておくこと。

15. 手書きで付図を作成する場合は黒インクで鮮明に製図し、直ちに印刷にまわし得るまでに完成しておくこと。付図の縮小率は 2/3 が適当であり、従って、原図の大きさは縮小率と実際に印刷された付図の大きさを考えて作図することが望ましい。製版されたときの付図ならびに写真の大きさには特に制限は設けない。なお、写真は付図として取り扱い、付図の通し番号を付す。

付表はできるだけ簡素化し、2 頁にまたがるものや折込みを必要とするものはできるだけ避けること。また、付図の説明および付表のタイトルもできるだけ簡略化し、必要な説明は本文で行うこと。付図の説明および付表のタイトルは別頁にまとめて記載し原稿末尾に添付する。

16. 付図と同時に製版される記号ないし簡単な説明用の文字の大きさは、付図と釣合ったものを用いること。これらの記号や文字などは、手書きの場合は市販のロトリングやタイプトーンなどを利用のこと。フリーハンドによる稚拙なものは受理しない。

17. AUTHOR CONTRIBUTIONS には全ての共著者について論文内における役割を簡潔に記すこと。

(例) S. Nishimura designed the study, performed the histological experiments, analyzed the data and wrote the paper. D. Tatsumi performed the cell culture experiments. Y. Takahashi performed the statistical analysis. K. Shimizu and Y. Ozaki participated in the design of the study and

performed the behavioral experiments. D. Yasutake designed the study, supervised the work, wrote the paper and provided facilities and resources. All authors assisted in editing of the manuscript and approved the final version.

AUTHOR CONTRIBUTIONS が記述されていない原稿は受理されない。

18. REFERENCES の中にあげる参考文献の書き方は下記の規定に従う。

a. 文献は著者の ABC 順に配列する。
b. 同一著者の文献は年代順に配列し、同年に発表されたものには年号のあとに a, b, c,を付けて区別する。著者が 3 名以上の場合は、第 2 著者以下が異なっても、同年に発表されたものは、年号のあとに a, b, c,を付ける。
c. 共著論文は第 1 著者の ABC 順、次は第 2 著者の ABC 順(以下これに準ずる)に配列する。
d. 同一著者について単独論文と共著論文がある場合には、先ず単独のものを上記 b の規定に従って年代順に配列し、次に共著論文を上記 c によって配列する。

e. 文献の書き方
(i) 文献の記載順序は、著者名、年号、論文表題、誌名、巻、頁の順となる。各巻が通し頁でない雑誌については、括弧内に号を示す。これを例示すれば次の通りである。

Smith, J. O., R. L. Lemaster and M. A. Jones 1961 The effect of cortisone on the release and metabolism of thyroid hormone. *J. Invertebr. Phys.*, **10**: 55-90

特に著者名(スモールキャピタルは使用しない)、第 2 著者以降の姓と名の順序(第 1 著者とは異なる)、全記した論文表題、略記した誌名(誌名はイタリック体)、巻・号、頁の書き方(巻数のみボールド体)および ., : などの用い方に留意のこと。

(ii) 単行書の書き方は、例えば

Lack, D. 1947 *Darwin's Finches*. Cambridge Univ. Press, Cambridge (England)

とし、書名はイタリック体であらわす。特別に引用頁を示しておきたいときは、次のように最後尾に書きとめる。

Cambridge Univ. Press, Cambridge (England), pp.15-18

また、版数を明示するときは、書名の次にコンマを付け、そのあとに例えば 3rd ed. として挿入する。

(iii) 訳書の引用は、例えば

Lysenko, T. D. 1946 *Heredity and Its Variability*. Transl. by T. Dobzhansky, King's Crown Press, New York

とし、前項に従い、書名は、イタリック体とする。

(iv) 単行書または叢書に登載された論文を引用する場合には、例えば

Stern, H. 1960 Biological synthesis of deoxyribonucleic acid. In "Methods in Biochemistry", Vol. 4, ed. by G. Hopkins and O. Smith, Academic Press Inc., New York, pp.210-300

とし、著者名、年号、表題、出典〔この場合は引用符“ ”(double quotation marks) を

用い、書名はイタリック体としない〕、巻数(叢書の場合のみ必要)、編者、発行所、掲載頁の順に書く。

19. 本文中での文献引用は、必ず著者名と年号を併用すること。例えば

Their odour is said to resemble that of ripe pears of bananas (Locy and Johnston, 1920).

Davidson *et al.* (1951) analyzed the amino acid composition of soil by paper chromatography.

著者名の引用の場合、著者が2名の場合は、例えば Smith and Crowson (1970)のように and, et, und などを用いて示す。著者が3名以上の場合は、例えば Schwarz *et al.* (1972)のように *et al.* を用いて示す。

20. 註および脚註は数字のルビを用いて示す。ただし、本文の第1頁に記す corresponding author には* (asterisk)を用いる。また、付図・付表の註はできるだけこれを避け、必要な説明は本文中で行うこととし、やむを得ない場合の註はできるだけ簡潔にすること。

平成12年8月18日制定

平成14年8月7日改正

学芸雑誌・紀要の著者所属の表記法（申し合わせ）

農学研究院紀要・学芸雑誌編集委員会

学部生、院生、教員の所属名は正式には異なるが、学芸雑誌・紀要の著者名欄には教員の所属名だけを書き、学部生・院生の正式所属名は脚注とする。ただし、その所属名は省略せずに正式名を全部書く。また、学部生、院生の所属名がその入学年次で異なる場合は、できるだけ正確に表記する。

九州大学大学院農学研究院紀要 投稿用チェックシート

投稿原稿で間違いやすい事例をピックアップしています。詳しくは投稿規定を参照してください。

表紙

- Running head* (タイトルと著者氏名) はイタリック体 (上段欄外)
2名までは *A and B*, 3名以上は「*Top author et al.*」とする。
- タイトルのイニシャルは大文字表記で**ボールド体**, センタリング
- 所属の異なる著者は肩付き数値をつける。
- 著者の *corresponding author* には*(asterisk)
- 著者名は**ボールド体**で, 姓は大文字表記, センタリング
- 著者下の研究室名は本研究院教員の現在所属する 1 研究室を記す。(他は脚注に), センタリング
- 大学院生, 学部生, 研究生等の正しい表記 (脚注に入れる)
- corresponding author* のメールアドレス (脚注に入れる)

九州大学大学院 農学研究院 紀要 原稿表紙見本 (1 ページ)

Running head: *Short title, A. KYUDAI et al.*

Title of Manuscript

A-Insei KYUDAI¹, B-Gakubusei KYUDAI², C-Kyouin KYUDAI* and D-Kyouin KYUDAI

Laboratory of □□, Division of △△, Department of ○○, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 819-0395, Japan

(*Received* [--- blank ---] *and accepted* [--- blank ---])

¹Laboratory of □□, Division of △△, Department of ○○, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University

²Program of ◇◇, Course of ☆☆, Department of Bioresource and Bioenvironment, School of Agriculture, Kyushu University

* Corresponding author (E-mail: kyudai@agr.kyushu-u.ac.jp)

一般的注意事項

- 投稿申込書は認印を受けた上で、PDF 等電子ファイルで提出。
- 電子ファイルおよび原稿 PDF で入稿（本文および図表は別途ファイル）。
- ABSTRACT の長さは 300 語以内。
- 書式レイアウトは double space (25 行/page)で行う。
ABSTRACT, Key words, INTRODUCTION, MATERIALS AND METHODS, RESULTS, DISCUSSION, AUTHOR CONTRIBUTIONS, ACKNOWLEDGEMENTS, REFERENCES, Table Legend and Figure caption, Table, Figure (写真も Fig.とする)の順
- 第一レベル（章）の見出しは全て大文字，センタリング
- 第二レベル（節）の見出しは**ボールド体**，レベル番号は付けない。
- 第三レベル（項）の見出しはイタリック体，レベル番号は付けない。
- イタリック体の表記
 - 学名, *et al.*, *ex*, *ibidem (ibid)*, *in litteris (in litt.)*, *in vacuo*, *in vitro*, *in vivo*, *per os*
 - 物理量・変量を示す記号
 - 下付き添字または上付き添字で，物理量・変量を表すもの
 - ベクトル量の記号 (**ボールド・イタリック体**)
- 単位は国際単位系(SI) を使用
- 付図・付表の **Table 1, Table 2, --, Fig. 1., Fig. 2, ---**はボールド体
- 付図・付表の挿入位置 本文（原稿の余白）に指示
- 本文中での文献引用 著者名と年号を併用
It was reported that--- (Tanaka and Koshiba, 2002). Davidson *et al.* (1995) analyzed ---.

文献

- 文献は著者の ABC 順に配列
- 同一著者の文献は年代順に配列，同年に発表されたものには年号のあとに a, b, c, ---
- 雑誌の記載順序 — 著者名, 年号, 論文表題, 誌名(イタリック体), 巻(ボールド体), 頁の順
Smith, J. O., R. L. Lemaster and M. A. Jones 1961 The effect of cortisone on the release and metabolism of thyroid hormone. *J. Invertebr. Phys.*, **10** : 55-90
- 単行本（タイトルはイタリック体）
Lack, D. 1947 *Darwin's Finches*. Cambridge Univ. Press, Cambridge (England), pp.15-18
- 訳書（タイトルはイタリック体）
Lysenko, T. D. 1946 *Heredity and Its Variability*. Transl. by T. Dobzhansky, King's Crown Press, New York
- 単行書または叢書に搭載された論文（In をイタリック体，タイトルを” ----”）
Stern, H. 1960 Biological synthesis of deoxyribonucleic acid. *In* “Methods in Biochemistry”, Vol. 4, ed. by G. Hopkins and O. Smith, Academic Press Inc., New York, pp.210-300